

『ヘンリー 8 世』における「真実」の意味をめぐって －イングランド宗教改革との関連性－

丹 羽 佐 紀 *

(2011 年 10 月 25 日 受理)

On the Meaning of Truth in *Henry VIII*: from the Viewpoint of
the English Reformation

NIWA Saki

要約

シェイクスピアの『ヘンリー 8 世』のプロローグでは、この劇が「真実」を描くものであることが強調される。しかし、劇的効果のために史実の順番が入れ替えられたり、台詞の矛盾が多く見られる点などから、この劇において示されている「真実」とは何なのかという疑問が生じてくる。宗教改革時代、「真実」という言葉が示す概念は、カトリック的なものからプロテスタント的なものへと変化した。劇の最後でも一見、プロテスタントの「真実」を讃えているように受けとめられそうだが、本当にそのような解釈でよいのだろうか。本論では、この劇における「真実」が持つ意味について、イングランド宗教改革の視点から今一度考えてみたい。

キーワード：ヘンリー 8 世、真実、カトリック、英国国教会、プロテスタント

内容種別：論文

はじめに

シェイクスピア晩年の作とされる『ヘンリー 8 世』が、もともと *All is True* というタイトルまたは副題で上演されていたことについては、1613 年 6 月 29 日のグローブ座の火事に言及した Sir Henry Wotton の手紙を始め、諸々の記録から、ほぼ批評家の見解が一致している。⁽¹⁾ 実際、劇のプロローグでは、「真実を目にされようとお金を払ったかたがたは、そのお望みが満たされます」とあるように、この劇が軽々しい茶番劇ではなくタイトル通りに「真実」であることが強調され

* 鹿児島大学教育学部 准教授

ている。⁽²⁾ その理由としては、ちょうど1603年に上演されて以降、好評を博したサミュエル・ロウリー (Samuel Rowley, -d. ?1624) の *When You See Me, You Know Me* (1603-5) という作品が、同じくヘンリー8世を扱った劇でありながら、道化のやりとりなど些か笑劇風に脚色されていることを意識し、これを暗に揶揄してのことと捉える批評家が多い。⁽³⁾

しかし『ヘンリー8世』のあらすじ自体は、いくつかの場面において歴史上の出来事の順序の入れ替えが為されており、史実を伝えるという意味において「真実」を描いているとは言えない。また、「権力の座にあるものが、たちまち転落するさま」にしても、登場人物たちは例えばロドゲイト (John Lydgate, c.1370-c.1450) 作『王侯の没落』 (*The Fall of Princes*, 1431-8) の挿絵に見られるような「運命の輪」というモチーフに単純に合致するべく描かれているわけではない。⁽⁴⁾ 劇の最後に、カンタベリー大主教クランマーが、未来の女王エリザベス1世の繁栄を高らかに予言する場面は、プロローグにある“misery”が示す「真実」を象徴しているとは言い難い。なぜなら、クランマーの予言では、王女エリザベスがやがてイングランドにあらゆる時代の鑑となって君臨し、皆に讃えられる事こそ「真実」とされているからである。

では、この劇において最初から強調されている「真実」とは何を指すのか。既に起こった歴史的出来事として、登場人物たちが辿った運命を多少なりとも把握しているはずのジェームズ1世時代の観客に対して、あえて提示される劇的「真実」とは何か。本論では、特にイングランドの宗教改革およびそれを取り巻く背景との関連において、この劇における「真実」という言葉が示す意味を考えてみたい。それによって、ヘンリー8世治下からカトリック、プロテスタントのせめぎ合いを経て上演時ジェームズ1世のスチュアート朝時代に至るまで、イングランドが英国国教会を確たる体制に整えた過程と、この劇との関連性を明らかにしたい。

1. カトリック教徒たちの盛衰

劇の中で、ヘンリー8世をとりまく人物のうち、権力の座から転落していく人物として、バッキンガム公、ウルジー枢機卿、そしてキャサリン妃が順番に描かれている。3人は共にカトリック教徒であるが、それぞれの立場において王の寵愛を失い、失脚する。彼らが権謀術数渦巻く歴史の表舞台から (同時に劇の舞台から) 姿を消していく時、切々と自らの運命の儚さを嘆き、それを聞く者にも同じような運命が待ち構えていることを警告する台詞は、リフレインのごとく内容的に重なっている。史実に照らし合わせて見れば、実際にバッキンガム公が処刑されたのは1521年、また1530年に没したウルジーは、キャサリンの死に先立つこと6年となっている。つまり3人の没年は、それぞれかなり離れているわけであるが、劇中で、3人の転落が連続して描かれることにより、観客には一見、カトリック勢力の衰退への方向性が意図的に強調されているかのように思われる。そして3人の転落と死は、劇の後半部分におけるアン・ブリン並びにカンタベリー大主教クランマーの台頭と、明暗の対比をなすようにも思える。なぜならアン・ブリンとクランマーは、やがて (観客にとっては既にあった出来事として) 英国国教会の頂点に立って

アリーへの言及は、観客の中に未だ多く存在したカトリック教徒にとっては、賛同し得るものであったろう。この時期、メアリーのカトリック回帰政策に勢いづいて、各地で秘蹟にまつわる数々の儀式や聖史劇が復活したことを思えば、メアリーを思い出させる事をあえて劇中で言及させることは、単にキャサリンが没落していくことに憐憫の情を催させるというよりは、カトリックがなお、イングランドに存在しているという真実を観客に思い起こさせるものであったと言える。キャサリン自身は、「イギリスの土など踏まなければよかった」(3.1.142)、この国には「私のからだを横たえるだけの墓地さえありそうもない」(3.1.150)と嘆くように、結果的にイングランドに受け入れられず滅びていくとしても、彼女がこの国で育んだ自国のカトリックへの信仰が、決してその死をもって途絶えるのではないことを観客は思い出すのである。

(3) ウルジー

ウルジーが失脚したのは、1529年10月のことであり、同じ年に敬虔なカトリック信者であるトマス・モアが大法官に就任している。翌1530年11月にはウルジーは逮捕され、それから1カ月もたたないうちに、レスター修道院で死去する。劇にも描かれているように、ウルジーは王の離婚問題にからんだローマ教会との調停に失敗し、また法王職への出世を企んでいたとして、逮捕され枢機卿の地位を追われることになる。そしてやはりキャサリンにおける描写と同じように、彼もまた、権力の極みから瞬く間に転落していく自らの運命を最期には諦念によって受けとめ、観客に憐憫の情を抱かせる。

だが劇中、彼について語られているのは、彼の政治的な負の面とその転落の有様だけではない。4幕2場において、ウルジーの最期の様子を聞きたがるキャサリンに対し、侍女グリフィスがウルジーを弁護する台詞は注目に値する。グリフィスは、ウルジーがいかに庶民のことを気にかけてくれていたか、また歴史に残る有名な大学をオックスフォードに創設し、イングランドのためにいかに善行を施したかを指摘する。それは単に、彼の過去の功績を讃えるというだけではない。彼の施した業は、その転落によって終止符を打つのではなく、後の世にまで残り、引き継がれていくことを意味する。カトリックの側に在るウルジーの影響は、キャサリンの影響と同じようにその後も続く可能性が示唆される。そしてそれは観客も歴史的事実として知っている。イングランドにおけるカトリックは、英国国教会の確立によって体制的には排除されていくとしても、決してその内実において消えていくわけではない。カトリックは至るところでその形を遺しつつ、やはり後の世も存続していくのである。

2. プロテスタント勢力の台頭か？

(1) アン・ブリンとクランマー

アンの戴冠式、また最後の場面における王女エリザベスの洗礼式で語られる、クランマーの朗々たる祝福の予言は、劇の観客に事実として認識されるエリザベス1世時代の繁栄を、改めて観客

に想起させるものである。それはジェイムズ1世の治世に至る華々しいイングランドの繁栄を、純粹に讃える象徴的場面であるようにも思える。しかし、それは同時に、イングランドのプロテスタント繁栄を讃えていると言えるのであろうか。

アン・プリンは、1530年頃には既にヘンリー8世の側室であり、1532年にペンブルック公爵夫人となっている。彼女は熱心な宗教改革論者で、それ故にウルジーに疎まれ、結婚を反対されたと言われる。⁽⁸⁾ 3幕2場でも、ウルジーが彼女のことを「熱烈なルター信者」で、「われわれにとって望ましくない存在」(3.2.99-100)と表現し、危機感を募らせている。したがって、彼女はプロテスタントの側からすれば、将来の王妃として肯定的に描写されているように見える。

ところが、2幕3場のアンと老婦人との会話の場面では、アンはあどけない少女のようでもあるが、会話の内容はセクシュアルな要素を含み、そのアンバランスに観客は少々戸惑うことになる。老婦人が「王妃になれるなら処女の操を棒にふっても」と言う時、アンはそれを「私は処女の操にかけて王妃なんかになりたくないわ」と否定するのであるが、老婦人は次のように、アンの女性心理を暴き出してみせる。

Old Lady: You that have so fair parts of woman on you,
 Have too a woman's heart, which ever yet
 Affected eminence, wealth, sovereignty;
 Which, to say sooth, are blessings; and which gifts,
 Saving your mincing, the capacity
 Of your soft cheveril conscience would receive,
 If you might please to stretch it. (2.3.27-33)

老婦人の台詞を裏付けるように、アンはその後すぐに、宮内大臣の訪問を受け、王からのペンブルック公爵夫人の爵位と財産を受け入れる。そして現実には王妃になることを考える時、この老婦人との会話は逆説的に、アンが、老婦人が指摘するとおりの女性であることを証明する。A. F. Marotti は、特にエリザベス1世時代、プロテスタントたちが女性とカトリックを結びつけ、どちらも偶像崇拜的で、迷信深く肉欲的な存在として非難したことに触れ、とりわけカトリックの女性は“wanton woman”と見做され、悪魔と等しく忌避されたと述べている。⁽⁹⁾ Marotti は、具体的に非難された女性として、エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, c.1552-1599) の *The Faerie Queene* (1590,1596) に登場する Duessa、スコットランド女王メアリー・スチュアートなどの例を紹介している。このような事例を考えれば、アンと老婦人との会話の場面は、プロテスタントの台頭を華々しく期待させるというよりはむしろ、R. Lewinsohn も述べるように、後にヘンリーが「淑徳に欠ける」(“lack of virtue”)としてアンを断罪した事実を想起させる。⁽¹⁰⁾ アンは、王妃となる半面、当時のプロテスタントが他ならぬカトリックの女性に対して抱いたイメージを

持つ女性としても描かれているのである。

クランマーは、1533年から1556年にわたってカンタベリー大主教を務め、プロテスタント体制の確立に大きく寄与した人物である。それゆえ、カトリックの立場にある登場人物が舞台を去り、入れ替わるように登場して洗礼式で祝福の予言をする彼の劇的役割は、プロテスタントの台頭を象徴するかのように見える。彼の予言自体は、王女エリザベスの未来の繁栄を「真実」と呼び、その意図するところが明確である。しかし、5幕2場でウインチェスター司教のガードナーに嫌がらせをされる時、彼自身は王に頼ろうとする人間的弱さを垣間見せる。それは見方を変えれば、彼の信仰が、教義的である以前に人間的に脆く、王への服従という必要性の前に屈服することを意味する。彼もアンと同様、いわゆる真に教義的な意味でのルター派プロテスタントとして描かれているわけではない。

(2) ヘンリー8世

劇のタイトルが『ヘンリー8世』であるにもかかわらず、劇の中におけるヘンリー8世の位置づけについては、未だ見解が定まっていない。John Margesonも述べているように、ヘンリー8世を、劇の中心にいながら周囲に翻弄されやすい人物として描かれているとする批評家もいる。¹¹⁾ 確かに劇の展開において観客に強い印象を与えるのは、むしろ彼を取り巻く周辺の登場人物であって、本来主人公であるはずのヘンリー8世は、例えば『嵐』に登場するプロスペローのように、劇的なあらすじの展開を司る要^{かなめ}の人物となっているわけではない。だがいくつかの場面におけるヘンリー8世の描写を見ると、彼の役割の曖昧さはその振る舞いの両面性に起因しており、またそれこそが彼についての「真実」を伝えてもいると言える。

1幕2場で、キャサリンが必死に王に訴えるにもかかわらず、ヘンリーは安易にウルジーやウルジーの手先である監督官の言葉を信じ、バッキンガム公を断罪する。このことは、ヘンリーが王の立場にありながら真相を見抜いていないこと、王といえども完璧な洞察力を持つわけではないことを示している。王であっても、人間であることには相違なく、全ての取り巻きの真相を把握できる存在ではない。観客はこの場面の描写に、王の「弱さ」もしくは人間的不完全さという真実を見る。

ヘンリーがウルジーの実態をわかっていないことは、前述2幕1場の紳士たちの会話によって裏付けられる。この場面によれば、一般市民たちが見抜いている事を、王は見抜けていない。またヘンリーは、2幕4場において、自分がキャサリンと離婚しなければならない理由を、公の場で説明しようとする。史実においても表向きの離婚の理由は、世継ぎ問題がからんでいたとされるが、劇の中では民衆はそのように捉えてはいない。キャンペーアスが、法廷を延期するよう要請すると、ヘンリーは次のようにつぶやく。

King:

I may perceive

These cardinals trifle with me: I abhor
 This dilatory sloth and tricks of Rome. (2.4.233-35)

このことは、彼が表向きの態度と本音を使い分けていることを示す。実はとくにアンという別の女性を好きなのであることを、2幕2場でサフォーク公がつぶやくが、それと歩調を合わせるかのように、老婦人がアンの女性としての本音を突いてみせる。劇の中では、明らかに王のアンへの心変りが真実の理由として描かれているのである。そこには、非常に人間的で曖昧な、そして宗教的かつ教義的な側面においては、何らローマからの離脱や変化を求めているわけではない王の姿が垣間見える。実際、彼がクランマーをかばおうとする5幕2場で、「聖母マリアにかけて」(“By holy Mary” (5.2.32))と誓う場面がある。聖母マリアは、カトリック信仰において最も重要な女性で、ヘンリーがプロテスタントであるとすれば、この台詞は不自然である。¹²⁾だが、もともとは熱心なローマ教会擁護者であったヘンリーが、このようにカトリック的な振る舞いを見せるのは、逆に自然なこととも言える。¹³⁾

3. Pageantの意味 —中世奇蹟劇とカトリック—

『ヘンリー8世』の劇中では、アン・プリンの戴冠式と王女エリザベスの洗礼式という、2回の華々しいパジェントが繰り広げられる。ジェイムズ1世の時代は、「見せる」ことが主な目的であるパジェントが広く流行し、この劇にそのような華々しい場面が取り入れられたのも、観客の嗜好を反映してのことと思われる。

もともと、このようなパジェントは、中世カトリックの時代にイングランドの様々な地方で展開された、奇蹟劇からの流れを汲んでいる。いわゆる大通りで繰り広げられる戴冠式のパレードも、この流れを汲む。G. Wickham は、1377年のリチャード2世から1603年のジェイムズ1世の時代までに行われた戴冠式の、パジェントとしての事例について紹介しているが、それがカトリックの奇蹟劇や聖史劇を源として、人々の間で祝祭行事として定着してきた様子が見える。¹⁴⁾このようなイベントは、後に偶像崇拜の最たるものとしてプロテスタント側に攻撃されるのであるが、事実とは言え、エリザベス1世時代にも、女王はカトリック勢力を退けたとはいえ、王侯の権威を大衆に誇示するため、政治的プロパガンダに利用できる手段として、パジェントを容認した。¹⁵⁾カトリック的な側面を否定しつつも、自らの権威を示すためには、このような「見せ場」は政治的に都合がよかった。また祝祭的な気分を盛り上げられることから、大衆にも受けがよかったのである。

したがって、劇中に2回もパジェントが出てくることは、観客の注意を惹きつけたことはもちろん、カトリック的側面をも大いに持っていたことを意味する。エリザベス1世に引き続いて英国国教会を推し進めたジェイムズ1世が、このような儀式的イベントを取り締まらなかったのはなぜか。それは、彼が、早世した息子ヘンリーほど熱心なプロテスタントでなかったという見方

もできるが、キリストの秘蹟に自らを重ね合わせて、自身の神性をアピールするのに効果的な手段だったからとも言える。ジェイムズ 1 世は、ロイヤル・タッチを盛んに行い、自らの神性を誇示した王である。このような王にとって、イングランドの王の将来を讃える劇中のパジェントは、カトリック的であっても排除の対象とはなり得なかった。

以上のことからわかるように、『ヘンリー 8 世』においてパジェントが盛り込まれたこと自体、カトリック的であること、イングランドにプロテスタント的な制度が確立されてなお、両方の要素が王にさえ存在するという「真実」を、この劇は知らしめているのである。それは、C. Baker も “...the paradoxes and ambiguities of kings and would-be kings whose religious convictions are tempted by their political ambitions.” と述べているように、いわば逆説と曖昧さの上に築かれた真実と言ってよい。¹⁰⁾

終わりに

これまで述べてきたように、『ヘンリー 8 世』は、歴史的に重要な人物が次々と登場する劇でありながら、決して華々しいプロテスタントの「真実」の側面が描かれているだけではない。シェイクスピアは、様々な場面で、それぞれの登場人物の光と影の部分を共に描き出し、そこにカトリック的な側面とプロテスタント的な側面の両方を「真実」として織り込みながら、この劇を奥深いものにしていくと言える。ヘンリー 8 世からエリザベス 1 世、そしてジェイムズ 1 世の時代にかけて、「真実」が何を意味するかはとても重要で、その解釈が大きく揺れ動いた時代であった。それまでカトリックにおいて「真実」として捉えられていたあらゆる事が斥けられ、プロテスタントが「真実」とされるようになった。クランマーの予言は、そのようなプロテスタントの「真実」の勝利を宣言するかのよう響く。しかし、『ヘンリー 8 世』の劇中における様々な場面は、「真実」がそのような二者択一的な概念で捉えられないことを、観客に指し示していると言える。

註)

- (1) 『ヘンリー 8 世』がシェイクスピアとジョン・フレッチャーの合作であるとする説は多く、アーデン版の編者 Gordon McMullan は、タイトルにも “William Shakespeare and John Fletcher” と表記している。ケンブリッジ版では、編者 John Margeson は、Introduction で合作説とシェイクスピア単独説との両方に言及しているが、それを第一の問題とは見做していない。(William Shakespeare, *King Henry VIII*, ed. John Margeson (Cambridge: Cambridge UP, 1990) 4-14.) 本論でも、作者の議論についてはここでは触れない。
- (2) シェイクスピアの作品の日本語訳については、小田島雄志訳『ヘンリー八世』(白水社、2010 年)を使用した。
- (3) John Margeson は、材源としてのロウリーの作品について、次のように述べている。“...a romantic chronicle play of the old-fashioned kind, which shows Henry as a popular hero, disregards chronology, is often fiercely anti-papist, and spends much time on the antics of two fools, Patch and Will Summers.” (*King Henry VIII*, 3.)
- (4) *The Fall of Princes* (1431-8) は、ボッカッチオ (Giovanni Boccaccio, 1313-75) の『名士列伝』(*De Casibus Virorum Illustrium*, c1365) の仏訳版をもとに、Lydgate が英訳した、3636 行からなる作品である。この作品に施された Fortune の細密画をはじめ、広く図像学とシェイクスピア作品を結びつけて分析および解説を施した書としては、岩崎宗治著『シェイクスピアのイコノロジー』(三省堂、1994 年)が挙げられる。

- (5) William Shakespeare, *King Henry VIII*, ed. Gordon McMullan (London: Thomson, 2000) 204.
- (6) シェイクスピアの作品からの引用および行数表示は、John Margeson ed., *King Henry VIII* (Cambridge: Cambridge UP, 1990) に従う。
- (7) Peter Marshall and Alec Ryrie ed., *The Beginnings of English Protestantism* (Cambridge: Cambridge UP, 2002) 15.
- (8) アンガルトー信者ゆえにウルジーに嫌われたとするのは、John Margeson によれば、Holinshed ではなく John Foxe の *The Acts and Monuments of Martyrs*, 2 vols (1596) の記述に基づく。(Henry VIII, 132)
- (9) Arthur F. Marotti, *Religious Ideology & Cultural Fantasy: Catholic and Anti-Catholic Discourses in Early Modern England* (Notre Dame: University of Notre Dame, 2005) 37.
- (10) Richard Lewinsohn, *A History of Sexual Customs* (London: Longmans, 1958) 181.
- (11) John Margeson は、劇の中において、ヘンリーがいかに関の人物たちの言葉に翻弄されるか、また誰も王に真実を伝えようとしないことについて触れている。(King Henry VIII, 35-36.)
- (12) 1575年にカンタベリー大主教となったエドモンド・グリンダル (Edmund Grindal, 1519-1583) は、1571年にヨーク管区の信徒たちに出した禁止令 ('Injunctions Given by the most reuerende father in Christ, Edmonde . . . in his Metropolitanical visitation of the Prouince of Yorke') の中で、聖マリアの清めの儀式などで蠟燭を燈すなどの迷信的な行いをしてはいけないと述べている (Injunction 16)。David Cressy and Lori Anne Ferrell, *Religion and Society in Early Modern England: A Sourcebook – Second Edition* (New York: Routledge, 2005) 107.
- (13) Peter Marshall, *Religious Identities in Henry VIII's England* (Aldershot: Ashgate, 2006) 169. Peter Marshall も、ヘンリー 8 世の治世について、長く 'Catholicism without Pope' と言われてきたことなどを紹介している。
- (14) Glynne Wickham, *Early English Stages: 1300 to 1660*, Vol. 1. 1300 to 1576 (London and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1980) 51-111.
- (15) エリザベス 1 世が、政治的プロパガンダの手段としてのパジェントを否定せず、むしろ利用しようとしたことについては、Stephen Hamrick, *The Catholic Imaginary and the Cults of Elizabeth, 1558-1582* (Farnham: Ashgate, 2009) 37-46 に詳しい。
- (16) Christopher Baker, *Religion in the Age of Shakespeare* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2007) 61-62.

主要参考文献

- Armitage, David, Coral Condren, and Andrew Fitzmaurice, eds. *Shakespeare and Early Modern Political Thought*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Baker, Christopher. *Religion in the Age of Shakespeare*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2007.
- Berry, Philippa. *Of Chastity and Power: Elizabethan Literature and the Unmarried Queen*. London: Routledge, 1994.
- Cressy, David, and Lori Anne Ferrell. *Religion and Society in Early Modern England: A Sourcebook – Second Edition*. New York: Routledge, 2005.
- Hamrick, Stephen. *The Catholic Imaginary and the Cults of Elizabeth, 1558-1582*. Farnham: Ashgate, 2009.
- Lewinsohn, Richard. *A History of Sexual Customs*. Trans. Alexander Mayce. London: Longmans, 1958.
- MacCulloch, Diarmaid. *Reformation: Europe's House Divided 1490-1700*. London: Penguin Books, 2003.
- Marotti, Arthur. *Religious Ideology & Cultural Fantasy: Catholic and Anti-Catholic Discourses in Early Modern England*. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 2005.
- Marshall, Peter, and Alec Ryrie, eds. *The Beginnings of English Protestantism*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Marshall, Peter. *Religious Identities in Henry VIII's England*. Aldershot: Ashgate, 2006.
- Ryrie, Alec. *The Gospel and Henry VIII: Evangelicals in the Early English Reformation*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Shakespeare, William. *King Henry VIII*. Ed. John Margeson. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- , *King Henry VIII*. Ed. Gordon McMullan. London: Thomson, 2006.
- Wickham, Glynne. *Early English Stages: 1300 to 1660*. Vol. 1. 1300 to 1576. London and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1980.
- 岩崎宗治 『シェイクスピアのイコノロジー』 三省堂 1994年
 シェイクスピア、ウィリアム 小田島雄志訳『ヘンリー八世』 白水社 2010年